

日本医療秘書実務学会 第10回 記念大会 研究発表の概要

2019年8月31日(土)～9月1日(日)

発表 10分 質疑 5分

● 8月31日(土)

●は主発表者

時刻	発表者・共同発表者・タイトル・概要
16:00-16:15	<p>●中田沙織 (岡山市立市民病院)、山上峰生 (同)</p> <p>○外来業務における看護師とクラークの協働 当院は、ドクタークラーク (以下、DC) 30名在籍し、医師事務作業補助体制加算1 (15対1) を算定している。全DCを対象に現在行っている業務内容等のヒアリングを実施した。その結果、DCと外来看護師で業務内容が重複している部分があり、改善の余地があると考えた。外来看護師とDCそれぞれが本来の業務に専念出来るよう、2019年5月より新たに外来クラークを導入し、2職種間で業務内容が重複している部分をカバーすることとした。</p>
16:20-16:35	<p>●松岡智子 (川崎医療福祉大学)、山本智子 (同)、田中伸代 (同)、田村久美 (同)、黒木由美 (同)</p> <p>○学外実習改善手法の取り組み ～自作ポケットマニュアル導入の効果～ 本学科では、学生が学外実習に臨む際に、A4版の実習手引きを持参させていた。しかし、実習中に事前学習した内容やマニュアルをすぐに見られない、手元にマニュアルがなく実習が不安であるといった問題点があった。そこで、学生自身が修得した知識等を即座に発揮できるよう、また実習に対する不安を解消し、自分自身で問題解決していく力を修得できるよう、学生に自作ポケットマニュアルを作成させた。今回は、その導入効果を発表する。</p>

● 9月1日(日)

9:00-9:15	<p>●須和部隆代 (浜松医科大学医学部附属病院)、小野田真弓 (同)</p> <p>○医師事務作業補助者による医療文書作成に向けた初任者研修プログラムの試行報告 大学病院として医師事務作業補助者 (メディカルクラーク) の組織再編・業務整理を進めている状況下、2019年4月から新卒入職者を2名迎え、初期研修面での工夫や試行を余儀なくされている。新入職者は2人とも短期大学 (2年間) の卒業者在学時に医療秘書分野での基本教育は受けている。入職後の研修プログラムの方針として、大学職員としてのオリエンテーションを実施したのち、将来的な「医師事務作業補助体制加算」の算定に向けた32時間研修とOJTを院内で進めつつ、まずは簡単な医療文書の作成補助ができることを目標に初期研修を開始した。具体的には、診察記事と書類を照らし合わせた形で院内マニュアルを活用して簡便なものから徐々に難易度を上げていく方針で進めている。今回、そこで得られた知見等を報告する。</p>
9:20-9:35	<p>●仁宮 崇 (中国短期大学)</p> <p>○診療報酬請求事務とExcel操作の同時学習 医療事務職員にとって、診療報酬請求事務の能力は重要である。また、パソコンのExcelを用いての資料作成、データ集計分析といった仕事も事務職員には求められる。現在の学生は、中学や高等学校で情報科目を学習しているが、Excel操作が苦手な学生も少なくない。本学のパソコン実習の授業において、Excelを用いて診療報酬を算定することで、診療報酬請求事務を学びながらExcel操作に慣れる学習を実践した。</p>

9:40-9:55	<p>●石田朱美 (社会医療法人財団聖フランシスコ会 姫路聖マリア病院、川崎医療福祉大学大学院 医療秘書学専攻、播磨医師事務作業補助研究会)、若松良子 (姫路赤十字病院)</p> <p>○医師事務作業補助者と社会の関わり ~事務 staff に求められる業務と教育機会について考える~ 2008年の診療報酬改定後、医師事務作業補助体制加算が導入された。しかし、未だ医療秘書や医師事務作業補助者は国家資格として認められていない。そのため、求められる業務や体制は変容している。そこで、これまでに医師に対して行ったアンケート調査結果の経年変化を踏まえて、医療分野における『医師の働き方改革』に関わる職種の役割やその教育機会について報告する。</p>
10:00-10:15	<p>●服部しのぶ (藤田医科大学)</p> <p>○将来医療職に就く学生への外国語教育の一考察 医療系大学の1年生2学科における外国語(英語)教育の実践について報告する。医療現場で起こりうる状況を会話にし、その英語表現を学習する授業において、学生数約70名、英語力もほぼ同程度の2クラスで、同じ方法で授業を行ない、一方にのみ模擬患者を利用した結果、最後の定期試験の点数や学生へのアンケートから学習意欲に対する動機付けに変化があったかどうか検証する。</p>
10:20-10:35	<p>●江本直美 (特定医療法人竜操整形 竜操整形外科病院)</p> <p>○整形外科単科病院における診療補助業務の取り組みについて 当院は整形外科単科でケア・ミックス型の病院であり、地域に選ばれる病院を目指し日々業務を行っている。2014年5月から電子カルテを導入し、医師や看護師の負担軽減を図るために業務の拡充を行ってきた。そのうち、限られた外来診療時間の中で、患者中心の医療を行えるようにすること、待ち時間の短縮を目指すために、ドクター秘書が行っている取り組みと代行入力の効果を報告する。</p>
10:40-10:55	<p>●黒木由美 (川崎医療福祉大学)、山本智子 (同)、松岡智子 (同)</p> <p>○医師の事務業務の負担軽減に資する医療秘書の研究 ー岡山県下の病院勤務医へのアンケート調査からー 病院勤務医は、2024年から働き方改革関連法の適用となるが、医師が担う事務業務においてはさらなる医療秘書(医師の事務業務を補佐する人材)の活用が医師の負担軽減に資すると期待されている。そこで、医師の働き方改革を見据えた医療秘書育成プログラムの作成を目的とし、医師の事務業務の現状についてのアンケート調査を実施した結果を発表する。</p>
11:00-11:15	<p>●河合真知 (四天王寺大学短期大学部)</p> <p>○患者が求める医療事務職員の対人行動に関する実証的研究に向けて 医療事務職員のコミュニケーション力は必要な能力として示唆され、患者接遇の観点からも重要と考えられている。しかし、患者が医療事務職員にどのような対人行動を求めているかは、管見する限り実証的に示されていない。そこで、まず、医療従事者とのコミュニケーションで印象に残っている出来事について、患者への質問紙調査を実施。次に、医療事務職員とのコミュニケーションに絞った聞き取り調査を行った。その結果を報告する。</p>
11:20-11:35	<p>●上野節子 (倉敷平成病院 医療秘書課、川崎医療福祉大学大学院 医療秘書学専攻)、涌谷陽介 (倉敷平成病院 認知症疾患医療センター医師 センター長)</p> <p>○認知症疾患医療センターにおける医療秘書の活動実践報告 当院はもの忘れ外来の受診者が多く、2012年岡山県より認知症疾患医療センターに指定され、2017年3月の道路交通法改定正後、運転の可否診断・診断書作成医療機関となった。医療秘書はもの忘れ外来の予約・管理をしており、免許外来の立ち上げに参画した。主に診断書作成に必要な検査項目の抽出や、診察から診断書作成までの業務プロセスを段取りした。そして、2018年12月にはもの忘れ外来受診者に運転免許に関する調査を行い、その結果を院内研究発表した。今回はこれらの活動実践を報告する。</p>